

### ◆夏鳥◆

例年、4月に入ると、冬場を淀川の河川敷や流域で過ごした“冬鳥”たちが旅立ち、代わりに“夏鳥”たちがやってきます。ユーラシア大陸南方や東南アジア、オーストラリアで越冬した鳥たちが、繁殖のために日本に渡ってくるのです。

シギ・チドリ類では、『コアジサシ』や『コチドリ』などが広大な下流域をエサ場として利用しています。空中でホバリングしながら狙いを定め、一気に水面に突っ込んで小魚を捕まえる『コアジサシ』の狩りは見事です。『コチドリ』は点在する干潟や、時には水田でも、チョコチョコと歩き回りエサ探しに余念がありません。

また、中・下流域のヨシ原には、『ツバメ』や『オオヨシキリ』がやってきます。『ツバメ』は春先から家の軒先等に巣作りをして繁殖・育雛を行います。子育てが終わると、南に渡る晩夏までの間、鶺鴒や向島のヨシ原をめぐらし、数万羽を超えるような集団で過ごします。『オオヨシキリ』はヨシ原に営巣し、繁殖期間を通して「♪ギョギョシギョギョシ♪」というけたたましい声で鳴き続けます。縄張りを主張する姿は、必死さが伝わってきます。

一方、夏鳥として渡ってきて、一時的な休憩場所として中・下流域を利用する『キビタキ』、『オオルリ』といった種も観察されます。両種は、ともに上流の山間部の林などで繁殖しますが、日本に渡ってきて、まずは都市部のまとまった樹木のある公園や、大河川の河畔林などで休憩し、河川沿いを徐々に上流を目指しながら、山間部に辿り着きます。つまり、淀川の流れが繁殖地への“道標（みちしるべ）”としての重要な役割を果たしていると言えます。このように、冬鳥と同様に夏鳥も、多様な種が淀川を生活環の重要な一部分で利用しています。



●コアジサシ



●コチドリ



●ツバメ



●オオヨシキリ



●キビタキ



●オオルリ

環境省 環境カウンセラー  
NPO法人 nature works  
池田 哲哉

## 水辺の博物誌



昔は貴族、今は外国人の人気者。

ヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis*

街中の公園から淀川水系の河川敷まで、樹木がある程度茂る環境でよく見かけるヒヨドリ。果実や花の蜜を好むため、農業害鳥にもなっていますが、その昔、平安貴族の間では「仔飼い」にすると人によく慣れるため、愛玩鳥として盛んに飼われていたそうです。古今著聞集の記述などを見ると、現在の競走馬のように個体名も与えられていた人気者だったのですね。日本ではごく普通に見られる野鳥ですが、分布が国内に限られているため、海外のバードウォッチャーには人気の的となっているようです。

(画/木村理子)



## 来た・見た・聞いた 淀川雑記帳



特定外来生物の情報を収集しているうちに、この3年で猟師の友達が増えてきた。猟期にはシカやシシの肉を送ってくれるのだが、春になると山の幸が続いて送られて来る。獣のいる場所には人が入りにくい。だから、いろんな山菜が採れるのだそうだ。琵琶湖からはノビル、イタドリ、カンゾウ。愛媛

からはテイレギ、黒竹。北海道からはギョウジャニンニク、京都からはタケノコが届いた。何でもスーパーに売っている時代だが、産直ならではの新鮮さは、非常にありがたい。生物に加えて、植物の勉強もしたくなってきた。

(編集長・石山郁慧)

# 多種多様、淡水魚たちの生態と生活史 淀川水系魚類名鑑

希少野生動植物保存推進員  
横山 達也

## イトモロコ

*Squalidus gracilis gracilis*

コイ目コイ科カマツカ亜科スゴモロコ属の仲間です。分布は、濃尾平野以西の本州、四国、九州北部で、神奈川県や静岡県は国内移入種として定着しています。中・下流域の流れの緩やかなところに生息し、全長は最大で8cmほどに達します。近縁のスゴモロコやコウライモロコに似ていますが、体側にある側線鱗が背腹方向に長くなっており、また、体高が高く、見た感じが寸詰まりのような体形が特徴です。口には一対のひげがあり、眼径よりも長いのも特徴です。



産卵は、5月から6月の時期で、卵は粘性の弱い沈性卵で、水底にばらまかれます。付着藻類や底生の水生昆虫などの小動物を好む雑食性です。地味な魚ですが、家庭用の小型水槽でもよく慣れ、

飼育しやすい丈夫な魚です。ただ、スゴモロコ属は、春と秋の一日の水温変化の大きい時期には、白点病によく感染するので注意が必要です。かつて、本種を採集しようと、目の細かい雑魚用の投網を使って捕獲を試みたところ、投網の目合のサイズと本種の体のサイズがちょうど合致し、本種が投網に突き刺さるように200~300匹を一網で漁獲したことがあり、網から外すのに大変苦労したことがありました。このように、山陽や九州地方では、本種が非常に高密度で生息しているところがありますが、近畿圏ではこのように採集されることは極めて稀で、生息数は少ないようです。



under the water

the waterside

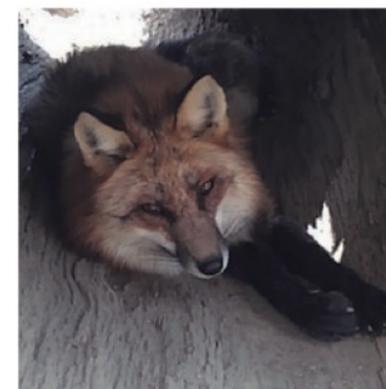
# 花想鳥感

四季折々、  
水辺の生物多様性

高槻市立自然博物館 主任学芸員  
高田 みちよ

## 河川公園のキツネ

今年のコラムは、哺乳類について連載します。淀川にもヒト以外の哺乳類はそれなりに暮らしています。最近、キツネの情報をよく聞きます。前回紹介したコミミズクが生息する水無瀬のゴルフ場跡地でも、キツネが確認されています。ビデオで撮影されたキツネは、ネズミを追いかけ捕まえては放していました。ネコが小動物をもて遊ぶのと同じような行動を繰り返し、ネズミが動かなくなると丸のみしていました。これ以外にも、淀川では時々キツネが確認されています。夜行性のキツネはあんなに大きいのに見つけにくく、普段はなかなか見られませんが、時々昼間に活動しているところを写真に撮られたり、足跡が残っていたりと、生息が確認されています。私の思い出に残るキツネとの遭遇は、10年以上前、鶴殿のヨシ焼きで火にまかれて見物人の前をダッシュで逃げていく姿でした。キツネといえば油揚げのイメージかもしれませんが、油揚げが好きなのはむしろタヌキのほうで、キツネは肉食性が強く、普段はネズミ、ヘビ、鳥、昆虫類などを食べています。足跡はイヌに似ていますが、肉球の配置や足運びなどで区別ができます。フンは獣毛が入っていることが多く、「キツネ臭い」ので慣れればわかります。丈の高い草で足跡やフンを見つけたら、イヌではなくキツネかもしれません。よ〜く観察してみてください。



◆写真提供  
(上) スキップ岡村  
(下) 池田哲哉



※参考 哺乳類のフィールドサイン観察ガイド (文一総合出版)

the sky & land

## 水辺の

# 虫眼鏡

川に棲む水生生物の魅力的な生態

環境省 環境カウンセラー 川島 大助

## ユスリカの仲間

夕暮れの水辺で蚊柱を目撃したことはないでしょうか。これらの多くは、ユスリカの成虫です。幼虫期は水中生活の水生昆虫ですが、トンボのように成虫になると陸で生活を始めます。漢字では「揺蚊」と書き、幼虫が体を揺らすように動かすことが名前の由来のようです。蚊と書きますが、刺すことはありません。ユスリカ科は、日本には約2000種が確認されており、水生昆虫の科の中では最も種数が多い分類群です。生活サイクルが短く、1年(4月~11月頃)の間に5~6代の世代交代を繰り返します。生涯のほとんどを幼虫で過ごし、蛹を経て成虫になりますが、成虫はわずか1日程度で繁殖、その後死んでしまいます。池、沼、ワンド、水路などの泥底に生息するセスジユスリカは、体長約10mmです。本種の体色は赤く、腹の下方の節に2対のエラがあります。汚濁した水域では溶存酸素が欠乏しているところが多いのですが、本種は少ない酸素でも結合できる特殊なヘモグロビン(エリスロクオリンという血色素)を持つため、赤色の体色をしています。一方、清流に生息するユスリカは茶~緑色の体色です。



セスジユスリカの幼虫



セスジユスリカの成虫

ユスリカの幼虫は、泥中の有機物を捕食し、消費分解による底質改善→水質改善に寄与します。また、成虫・幼虫ともに多くの動物(昆虫、魚介類、鳥など)の餌としても重要な役割を果たすことから、生物多様性の面からの重要な存在となっています。先に紹介したセスジユスリカの幼虫は水質指標生物でもあり、「大変きたない水」に生息する指標になっていますが、彼らは汚濁が進行した環境で底質改善・水質改善に貢献してくれていることを忘れてはいけませんね!

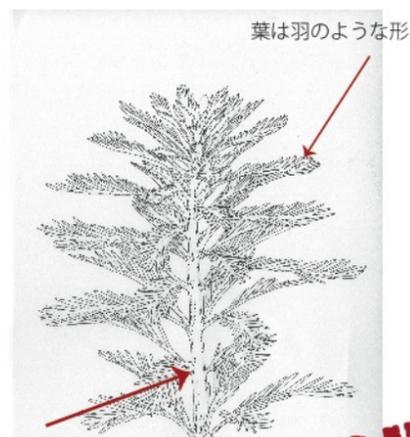
the worst 100

## 侵略的外来生物

# 淀川ワースト100

アリノトウグサ科 オオフサモ  
*Myriophyllum aquaticum*

淀川管内河川レンジャー 石山 郁慧



**AN INVADER**

アリノトウグサ科フサモ属の多年生抽水植物。南アメリカ原産で、北アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、アジア、オセアニアに定着。葉は美しく、羽のような形をしている。茎の太さは4~6mmで、1m以上になる。開花期は6月頃で、葉の付け根に小さな白い花を咲かせる。過去に水槽の観賞用水草として輸入・栽培されていたが、それが川に捨てられたりして野生化した。農業用水路に繁茂すると、通水障害を引き起こす原因となる。温帯~熱帯に分布するが、耐寒性があるため注意が必要だ。繁殖すると水面を広く被ってしまうので、見つけた場合はいち早く抜き取って防除しよう。



◆写真提供 池田哲哉